
ねくら

名無しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねくら

【Nコード】

N7255Z

【作者名】

名無しの

【あらすじ】

夏休みが明け、様変わりしたクラスメイトと相反して、負の観念に憑かれた少年、霧崎刑は、突然襲ってくる頭痛に悩まされながら、周りとは噛み合わない毎日を怠惰に過ごしていた。彼は永々とも思える時間を、自身の過去から逃げる様に、他愛も無い空想に費やしていた。文化祭が近づき、活気つくクラスであったが、相変わらず校内で嫌われている存在の少年には、居場所などあるはずも無かった。居心地の悪さを感じた少年は、いつもの様に授業を抜け出し、下らない妄想に耽ようと古びた資料室へ向かう。そこで少年は、一人の

少女に出会う……。

終わりの少年

《ねくら》

無かった。

僕には何もなかった。

僕は笑わなかった。

僕は泣かなかった。

僕は悲しまなかった。

僕は楽しくなかった。

僕は嬉しくなかった。

僕は憐れまなかった。

僕は悔しくなかった。

たくさん持っていないものがあつたから。

酷いことをしても。

酷いことをされても。

何も思わなかった。

何も感じなかった。

僕には表情が無い。

僕にはココロがない。

僕には何も無い。

僕は空っぽだ。

虚しい。

僕は生きてるのか。

僕は死んでいるのだろう。

何も感じないから。

なにも見えないから。

ここはとても暗くて、寒い。

ここには何も無いし、終わりが無い。

何時まで経っても終わらない。
何処まで行っても終わらない。

一生続くのだろう。

僕は逃げられない。

これが僕の全てだ。

この暗闇が。

ただそれだけが。

僕は欲しい。

ココロが欲しい。

あの子の様な。

暖かくて優しい。

ココロが欲しい。

僕には無いから。

僕は持っていないから。

だから、僕にはあの子が必要だった。

ロープ

絶望的な痛みのは、去っていった。

だけど、未だ、耳鳴りと頭痛が酷い。

神経は鈍り、頭はまるで鉛の塊の様に重たい。

この痛みは、吐き気すら催す痛みだ。

それに、全身が、震えている。

視界は真っ暗だ。

呼吸はだいぶ落ち着いたけど、まだ荒い。

今回は、本当に、運が無かった。

まさか、このタイミングであれが来るとは、思いもしなかった。

だから、なんの準備もしていなかった。

それでも、この失敗は、完璧に、僕のミスだ。

全く、毎回毎回こうも失敗ばかりしているとさすがに嫌気がさし

てくる。

こうまで失敗が積み重なると、もう、自分の弱さに只ただ辟易するしかない。

.....。

..... まあ、でも、こうやって繰り返していれば、何時かは、成功する時が来るだろう。

今のところ、僕はそう、信じている。

「ハハハ、失敗かア、残念だったナア」

「..... また、お前か」

「おいオイ、または無いだ口？」

「..... お前は、何時も僕が失敗すると、出てくるんだな」

「そうダナ、それが、俺の役目だしナ」

「嫌なヤツだな」

「それもまた、酷い言いぐさだな」

「だって、そうだと、僕が失敗した時ばかり出てくるから」

「まア、そう焦るなヨ。俺としちゃ、お前が何時も失敗してくれた方が、色々と、都合がいいんだからヨ」

「いつも、そう言うな」

「俺の立場からだト、そう言った見解になるんだヨ……まあ、それにしても、お前もなかなか懲りないヤツだな。先週も失敗したシ、先々週も失敗したじゃねエカ。まったく、オレもつくづくお前には手を焼かされるヨ」

「お前が、邪魔したのか？」

「ン、それは、違うナ。俺は何もしていない。大体、俺はよっぽどの事が無いト、何もしなイ」

「それじゃ、僕自身が、自分で？」

「マア、そう言うことなナア」

「……全く、どうしようもない恥さらしだね。これじゃまるで生きながらにして恥を晒している様なものじゃないか」

「まア、お前には恥をさらせる程の人間関係は無いけどナア」

「……ああ、それもそうだな。僕は人間が嫌いだからね」

「才前も一応、人間だけだなア」

「ああ、そうだ、僕は人間だ。だから僕は、僕が嫌いだ」

「ハハハ、そう、それでいいんだ。俺もお前も、随分と嫌われてる存在だからナア。それが自然の成り行きってヤツだ。俺たち八孤独に囲まれてるからナア。全く、嬉しいよナア」

「随分と、物寂しい人生だな」

「寂しいねエ、まア、寂しさってもんハ、人間が怖がるもんだよナア。人間かア、人間ネえ、でもナア、俺たちにとってはコレが普通なんだヨなア。常識ってやつだ。俺もお前も、つまり世ノ中の一般から言っテ、あまり普通ってヤツの部類に入らねエんだヨなア。そうだな、つまり俺たちは結構、例外的な存在って訳だなア。どうだア、嬉しい力？」

「……………」

「ハハハ、そんなにヨ口こんでもらえると、俺達もウレしいヨナあ」

「……………もういい、もう、消えてくれ」

「マあ、そう固イ事を言うなヨ。言われなクテモ、俺八もうすぐ消えるんだからヨお……………なア、俺達が必要になつたら、いつでも呼んでクレヨ。俺はお前が得意な事は苦手だけどナア、お前の苦手な事は大体得意だからヨオ」

「……………僕は忙しいんだ。僕は自分のやった事の後片付けをしなくちゃいけないからな。後始末をしないと。だから、お前は、早く消えるべきなんだよ」

「ハハ、後始末力、そうだよナア、後始末は面倒だよナア、何にせヨ、自分のした事の始末つてモンはよオ……………ハハハ。わかったヨ、俺八、もう、消える、けどナ、……………最後に一ツ、イイか？」

「……………」

「ハハハ、お前がさア、こういう事すんのハ、俺にとってあんまりメリットがねエんだけどヨオ。まア、もしもの時ハ、そんな時に考えるときはヨ、もっと、丈夫ナ縄、用意しとくべきだよナア」

溜め息すら出ない。

ただ僕は、暗い天井を見上げるばかりだ。

世の中に生きる事ほど辛い事はあるか？

死ぬのは一瞬で、生きるのは一生の苦しみ。

本当に？

本当にそうか？

案外、死んでしまうより、生き続ける方が楽なのかもしれない。

そうだとしたら、僕は

一般的な高校生の登校風景

ピー、ピー、ピー、ピー、ピー

鼓膜に土足で侵入してくる単調で不快な電子音。

……ああ……いつもコレだ……うるさいな……もう少し寝かせ

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

音はいよいよ僕の残りわずかとなってしまった脳みそ（蟹味噌同然）を叩き起こす程にやかましくなってきた。

……分かったよ、今日のところは僕の負けを認めよう。
仕方がないので、気怠く目蓋をオープンして目覚ましのスイッチを握りこぶしで叩き切る。

……また新しいの買わないと。
まったく、どうしてなのだろうか？
どうして、また、朝がくるんだ？

僕はただ、ずっと眠っていただけなのに。
そして、叶うならば、二度と目を覚ましたくないだけなのに、なぜ夜が終わってしまう？

まったく、嫌な朝だ。
否、それはなにも今日に限った事ではない。
一年中年中無休で平均的に僕の迎える朝は嫌な朝だ。

何が嫌か？

朝の日差しが嫌だ澄み切った空気が嫌だ聞きたくもないのに聞こえてくる鳥の呑気な鳴き声が嫌だあの意識がはつきりとしなないぬるま湯に漬かっているような惚けた自分が嫌だあと人 間がキラ

イだきりがない無いのでこちら辺で止めておく。

詰まるところ嫌なモノは嫌って事。それが言いたかった。

「だからと立ち上がり、洗面所に向かう。」

我が家の洗面所には鏡という恐ろしい物体は、無い。

正確に言つと、前はあつたが今は無い。

高校に入った時、思春期特有の若気の至りで木っ端のミジンコになつてしまった(トンカチで叩き割ってしまった)からだ。

あの時はアニ(仮)と初めて本気で喧嘩したな。

あれ、初めてじゃなかったっけ? いや、でもあれは僕が初めて

何て昔の思いでに浸っている暇は、あまり無い。

顔を洗い、歯を磨き、髪型はセットのしようが無い程の簾仕様なので、適当に分けるしか施しようが無い。

朝ご飯は勿論用意されている訳が無いので、胃の中にひたすら水道水を流し込み満たし、空想でモーニングセットを作り上げ、自らの体を欺き、我慢するしかない。

パジャマ代わりにワイシャツを脱ぎ捨て、パンツ一丁の僕は、ソファに無惨に脱ぎ捨てられていた制服のズボンを履き、クローゼットから新しい長袖のワイシャツを取り出す。

僕はどれだけ暑くても絶対に長袖しか着ないのだ。と、言つのは嘘で単に半袖を所持していないだけ。

散らかり放題のリビングルームにはあまり座れるスペースが無い。というかこちらがどんなに座りたいと切望しても、座れない。

仕方がないのでソファ(普通一般に言うやつではない)に体育座りをして、リモコンという文明の利器を使いテレビジョンのスイッチを入れる。

我が家の時代に取り残されたアナログなテレビの画面が、だんだんと人の形の像を結び始める。

何か面白いニュースはないか、と数分間色々チャンネルを変えてみたが、一昨日に起きたお偉い人の失言を何度も同じ様なフレー

ズを用いて揚げ足を取るのに夢中な報道ばかりで、どれもこれも似たり寄つたりの気の抜けたものばかりだ。つまり、目星しいものは……無い模様。

画面から目を離し、しばしば外の長閑な風景に目を移す。

目の保養を行いつつ、いつも通り頭の中で暗闇に向かつて話しかける。

殺人事件は毎日何処かで起きているし、政治家の失言や汚職だって最近ニュースで取り上げられる様になった訳ではない。なにせ、僕らが生きる素晴らしきこのご時世は子が親を殺すのが珍しい事ではないのだから。僕ら視聴者も他人面で毎日毎日そんな血なまぐさい話を画面越しに見聞きしているし、僕らの感覚が麻痺するのも無理からぬことである、と思いたい。

再び画面に目を向ける。

最近逮捕された殺人犯について、逮捕前はどんな様子だったかを、近所に住んでいる住民にリポーターがインタビューを試みている場面であった。

インタビューされた中年の女性は「まさかあの子があんな事をするなんて、思わなかったわ」とか「私が挨拶したらちゃんと返してくる、いい子だったのよ」なんてお決まりの返答をやや興奮気味に鼻息荒く語っていた。このおばさんは至極まともだ。ビイコーズウ、少なくともこのおばさんはインタビュー中に顔の筋肉をほころばせてないから。たまにいる言葉と表情が一致しない奴。うすら笑いを浮かべながら「かわいそうだ」とか「信じられない」だの「絶対に許せない」とか言ってるヤツらだ。あいつらは一体どんな心境でものを言っているのだろうか。……彼らは目も当てられない様な悲惨な事件を口では残虐だの非道だのと言いつつも、胸の内で実際は心底そんな様な事件を楽しんでいるのだろうか。やはり所詮、他人事でしかないのだろう。結局人間とはそういう生き物だ。どんなに知識を貯えて倫理的に振る舞う真似事をして、結局は自分の身に起こっていないことに対してはいつだって花見でもしている気分で

しかない。人の不幸は蜜の味とは良く言ったものだ。誰だって自分より不幸な人間を見れば表では同情の意思を示しつつも裏では心の底から蔑み自分より下の人間が居る事実に対して安堵している。そのくせ自分は真人間であるだとか悪い事はしてはいけないのだと悪怖れも無く平然と言う、そしてあまつさえ自分の事は棚に上げたまま放置しておいて、他人の悪所をわざわざ手間暇かけてまで見つけ出し、それを相手が再起不能になるまで糾弾する、しかし当事者である本人は当然の事をしたまてと言わんばかりに、正義の味方面である。まったくもってこういうのが人間という生物なのだから、いい加減ぼくは人間という仕事を任意退職したくなる。……まあ、しかし、そういうのは訳知り顔で勝手に不特定多数の人に対しての想像をしている僕が一番当てはまりそうなんだけれど……。いや、しかし、僕には未だ偽善者の皮を被っていられるだけの理性がある、とは、まだ思っている。

なんて事を一人悠長に思いつつ、ふと時計に目をやる。
時計の針は既に八時十分過を指していた。

……うーん、ヤバイ。

なにを隠そうボクの職業は学生だ。

それも、高校生だ。

世間一般かどうか知らないけど長く辛い人生においてなかなか甘酸っぱいであろうと期待される時期、そう、高校生。10年後に思い起こしてみるとあの頃に戻りたいと言う輩の絶えない、あの、高校生。思っていて非常に悲しくなっているこの僕も、一応、高校生。だが決して義務教育ではないのも、それまた、高校生。

だから、僕は焦らない。

ゆっくり余裕を持って無駄にかさばる重たい教科書を学校指定のバックに詰め込んでいく。

大人の男にはゆとりある余裕が大切なのだ。高校生が大人か子供かは各々の主観に任せるとして。

やっこのこと家を出る。

勿論、元気良く「行ってきまーす」なんてアットホームな言葉は一言も発しない。

「……………」
無言の旅立ち、自称現代っ子とはそういうものだ。

強い日差しを全身に受け、億劫ながら、とりあえず自転車を違法駐輪している公園まで歩く。

途中、近所の奥様方が僕の方を指差し、何かヒソヒソと話しているのを偶然、目撃。

間違っても良い意味で噂されているのではないと分かってはいるが、あえて爽やかスマイルを迸らせて会釈でもしてやるうぜ、と悪魔が僕の耳元で囁いてきたので、なんとか自分の手の平としりとりをして堪えてみる。

おっとう、おっかあ、おめえの息子は我慢強い子に育っただよ（日本昔話風）。

世間の風当たりを気にしている様では真の解脱者にはなれないと誰かが言っていた様な気がする。別に僕は別次元に行きたいとは思っていないけど。

自分の手の平にしりとりで三回負けたところで、ようやく公園に到着。

公園の草むらに隠した（？）自転車は、今日も撤去されていなかった。

その代わり、今日はカゴの中に溢れんばかりの空き缶が入っていた。未だ中身が少し入っているのも多数あった。

仕方が無いので、自転車に前蹴りをかまし、カゴの中の空き缶を地面にぶちまける。

昨日は生ゴミで、一昨日はネバネバした成人コミックスだった。それで今日は空き缶か。

……………。

今日はなかなか、運が良い日かもしれない。

そう思った。

外は夏休みが終わったというのに蝉がミンミンミンミンと小うるさいを通り越して僕的には全滅してほしい位うるさい。みんみんみんみんの方がふさわしいか？ 心なしか蝉の鳴き声がミンミンミンからシネシネシネに聞こえてきたのだが、耳の錯覚とは真恐ろしいものである。

まあ、そんな事はどうでもいい。

問題は蝉の鳴き方ではなく、この異常な暑さだ。

まだ自転車で走り始めて十分と経ってないのに汗でワイシャツが背中に張り付いてくる。はっきり言って気持ち悪い。いや、はっきり言わなくても十分すぎるくらい気持ち悪い。中にタンクトップでも着てくれば良かった、と少し後悔したが、時既に遅しなのでなるべく頭の中をマシユマロにする方針で生きたいと切に思う。

前方の信号がまるで青から赤に進化しようとしている全身タイツのオツさん（中身が）（たぶん）のカラータイマーみたいにせわしなく点滅を繰り返している。

こういう時は、その人の性格が良く現れる場面だと僕は思う。

もう間に合わないとふんで無駄な体力を使わずにゆっくりと進む奴と、別に急いでないのになぜか分からないけど無性に全力ダッシュしたくなる奴っていると思う。そこに今の僕のように限定された時間という制限が加わると、これまたおつなものだ。

で、僕は勿論前者の方である。

僕の場合は時間が絡んできて大体前者の方を選ぶと思う。体力無いし。

「……………」
それにしても、暑いな。

暑い中、わざわざ狙って照りつけていると錯覚しかねない太陽の

光に焦がされている他校の生徒を尻目に、僕は自転車道を道の小端に寄せ、木陰に隠れて一休みをする。

木陰に居るのに額に汗かきむさ苦しい醜態を晒しながら休んでいると、僕の目の前を、赤いランドセルを背負った女の子と黒いランドセル（赤だったら怖い）を背負った男の子が仲良く手を繋ぎ、笑顔で駆抜けていった。

このくそ暑いのに「うふふ」「あはは」とか聞こえてきそうで一気に真夏の怪談直しく背筋がブルブルしかねない。

僕はその様子を気の抜けた炭酸飲料みたいな心持ちで眺める。

今時、珍しい光景。

ボーイとガールがミーツして仲良く登校ですか。

うふふ、と、あはは、な世界。

うーん、青春の味がする。

山椒？

なんか苦いね。

そしてふっと思う……あー死にてーと。

気がつくのと、信号の発光ダイオードは既に緑になっていた。

それでも、僕は動かない。

道行く人が僕の事をジロジロと訝しむ目付きで見てきたので、やっとのことで僕はペダルを漕ぎ始めた。

全く、人気者はいやおうにも目立ってしまうから困ったものである。

すうんごい美少女

学校に着くと、幸運な事に未だいつもの（事務的）朝のホームルームが始まっていなかった。僕が教室に入ってきても声をかけてくる律儀なクラスメイトは人っこ一人いない。

それどころか「あいつ、学校辞めたんじゃないの？」とか「なんで、あいつ、未だこのクラスにいんの？」「仕舞には「あいつの席、どつか他のクラスに移動させちゃえば良かったね」と言うもはや空耳という秘技のキャパを軽く超えて尚かつ音量に全く気を使わない誹謗あーんど中傷のヴォイスが聞こえてくる始末。こんな時は自分がラブコメの主人公になったと錯覚しておく、心なしか耳が少し難聴になれる様な気がしないでもない。

夏休み前の平時から「キモイ」「死ぬ」は当たり前なので、いつもの事いつもの事と思ひ、軽くスルーしておきたい。

夏休み前と何ら変わらない日常。

歯車が欠けているから噛み合わないだけだ。

合わせる気も無いけど。

それはあっちも同じか。

まあ、取りあえず、いつも通りだな。

平穩無事な平和ボケゆとりな逆バブル世代の僕ですから、こんな態度は慣れっこ、これ常識。と、いつも通りに下らない事を考え、鼻を否応にもさす安臭い香水の匂いに顔をしかめつつ、なにげなく教室を見渡すと、男も女もやたら茶髪の生徒が多い様な気がした。女子なんか化粧をしている生徒もちらほら。何やら目の周りにマスカラを塗りすぎてパンダみたいになっている女子生徒までいる。うむ、これが夏デビューってやつか。僕も夏デビューすれば良かった。なんて身の毛もよだつ空想を頭の隅へ追いやり、幸運にも未だ定位

置に存在していた『まいちえあー』（三号）に座りながら取りあえずアホみたいに頬杖をついてみる。

と、髪をツンツンにした黒ぶち眼鏡の男子生徒が息つきながら教室に飛び込んできた。

彼の名前は勿論、僕の脳内メモリーには記憶されていない。というか、初めて見たような気がする。

何事か、と女子も男子も彼の方へと視線を投げかける。

僕は、窓の外の青々としすぎて返って気持ち悪い位などこまでも広がる空を見上げながら、耳だけそちらの方に向けた。

「ニユース！ ニユース！ 大ニユース！ 転校生！ 転校生！ すうんごい美少女！」

男子生徒が述語の抜けた主語だけの言葉を発する。

どうやら学年と季節、そして学校の三拍子を外しまくった転校生が隣のクラスに来るらしい。

この時期に転校してくるなんて、まるでどっかの漫画じゃないか。よほど深い事情があったに違いない。例えば前の学校の窓を全部たたき割ってムカつくヤツをバットで片っ端から血まなこにしたとか、愛する許嫁のためにわざわざ海外の学校からはるばる日本のこんなしょばい＆小汚い、ええ小汚いデスともな学校に転校してきたとか……あるわけないか。

男子生徒はなおも興奮した様子で止めどなく何か話し続けていたが、僕にはもうその声は雑音にしか聞こえなかった。

自称窓際図書委員

一時間目の授業は英語一だった。そして、僕のクラスの担任は英語教師である。

よって、ホームルームが終わると誰も願ってもないのにすぐに授業に突入した。

僕の通う学校は少し変わっていて、夏休みが終了して最初の登校日に喚起力ゼロの蒸し風呂の様な体育館に強制的に集められ校長の有り難い訓示を聞く習慣はなく、素晴らしい作詞・作曲の校歌を歌うというインディアンみたいな儀式も強制されない。おまけに堅苦しい頭髪チエックやら持ち物検査もないという比較的自由な校風だった。だったら、茶髪じゃなくて髪の色が金髪や銀髪はてはピンク髪そしてレインボオウな生徒が居てもいいじゃないかと思ったのだが、残念ながらこの学校には僕を含めてそんな大層な度胸を持つ者は居ない。誠に残念遺憾の極みである。いや、ホントに。

「霧埼、次の文を略してみろ」

英語教師兼担任（ ）が妙に高いかなきり声で僕を指名してきた。

「……………」

え、面倒くさい？

いやいや、僕は自称窓際図書委員ですよ。

それはどうでもいいとして。

僕がもし歌舞伎町辺りの売れっ子ホストだったら「御指名ありがとうございます」とうございます、マドモワゼエル。今夜もドンペリピンクうお願いシャツすうー……！！！！」

なんて言った可能性が最少にもあったかもしれない。けど、あいく僕は善良な高校生なんで……………。

寝たフリを決め込む。

「なんだ、霧埼はまた居眠りか、誰か起こしてやれ」

「……」

前方後方右斜め両方向の生徒の皆さんは、誰一人として、反応を示さない。

……全く、皆、恥ずかしがり屋さんだなあ。

「……あゝ、じゃあ牛島、お前が訳せ」

「えゝ俺っすか？ えゝと彼女は」

なんか、サラッと僕のドキドキ偽装就寝が流された様な気がする。なんか……得した？ と、あくまで、前向きに物事を捉えてみる。

人生前向きに物事を考えないとやって生けませんな。

特に、僕みたなヤツはそうだと思う。

まあいつも全然前向きじゃないけど、というか地面に恋焦がれて生きているけど。

せっかく嘘寝したのに起きるのも何か勿体ない気がしたので、とりあえず、残りの時間は人間の生活で欠かす事の出来ない貴重な睡眠時間に当てる事にしよう。願わくばレム睡眠位にはもっていきたいものである……。

幸せについて考えてみたら……

一時間目の終了するキーンカーンカーンという間抜けなチャイムとほぼ同時にクラス中の男子が教室から消滅した。あと噂好きの女子もついでに何人か消滅していた。

なんだろう？ 皆で集団連れションかな？ なんて事はないだろう、多分。

おそらく、例の転校してきた美少女を一目拝もうと、さながら伊勢神宮に向かう古の熱心な信者の如く隣りのクラスを覗きに行ったのだろう。勿論、僕は弁慶の立ち往生の如く（座っているけど）席から一步も動く気は無い。うるさい輩が消えて教室の人口密度が丁度良くなって良かったと思う。欲を言えば残った輩にも退出願いたい所だが、それならば僕が出て行った方がよっぽどつとり早いのでそこは自分の胸の内に秘めておくことにした。

二時間目の論理と三時間目の英語Wは堪え難きを耐えほんとに死ぬる位忍び難きを忍びなんとか耐えた。が、しかし、ここまで耐えてきた自分に非常に申し訳ないが、四時間目の数学は果てしなく苦手な科目なので、自分の弱い心に負け、泣く泣く辞退させてもらう事にした。

勿論、教師には心の中で「授業をサボりますよお」と言っておいた。

僕、真面目だから。

本当に死ぬる位の長期の休み後の授業は、死にそうな位、そう、本当にほんんんんんんとおおおおおーに死ぬる位退屈なモノである。あえて言おう。教室で真面目かどうか分からない

けど、一応、授業を受けている生徒達は愚者……じゃなくて勇者の集まりであると。

そんな訳で、僕はあまり利用される事のない日本史やら世界史の資料が無駄に置いてある教室の奥に、なぜか置いてあるベンチ（公園に置いてあるようなブルーのヤツ）の上に寝そべりながら、皆より一足早い昼休みを満喫していた。

ここは、薄暗くて風の通りも悪い僕の数少ないリラックスポイントの一つだ。

室内はホコリっぽく、ほのかにカビ臭い。それ故、生徒も教員も滅多な事がないとここを訪れる者はいない。たまに、授業時間を完全無視した男女（僕に理解できない存在）が突如として訪問してくる事はあるが、大体、黒板前の長机の席に座すので、僕の存在には気づきもしないで自分達の世界へどっぷりと漬かってゆく。まあ、こちらから関わりを持つともしなければ無害の部類に入るだろう。

とにもかくにも、今現在僕の憩いを邪魔する奴は居ない。

僕は静かに目を閉じた。

そうして現代の食料問題について考える。

今日の昼食はどうしようか？

また、水道水で凌ぐかな。いや、それだと5時間目の持久走の時120パーセントの確率で貧血になってぶっ倒れる。当然、誰も救いの手は差し伸べないので、体育教師のむさい肩に担がれて保健室へ……うん、考えただけでも身の毛がよだつ。

仕方ないが、コンビニで固形物でも買って凌ぐか。いや、だがしかし……最近まともな物を食べた記憶が無い……。当たり前の事だが僕に弁当なんて高等なものは作れないし作ってくれる心優しい彼女は、言うまでもない。

そんな事をたわいもなく考え込んでいて、唐突に思った。

幸せってなんですか？ と。

なんか、テレビ番組のタイトルみたいな質問になってしまったが。

……幸せって何だろうか？

毎日三食規則正しくバランス良く食事をとる事だろうか？

そうなる僕が即幸せの対象外になる。

それとも、何不自由なく日々の生活を送る事か？

いや、素晴らしい生涯の伴侶を迎えて仲睦まじく一緒に年老いていく事だろうか？

別に豊かな国に生まれたから幸せってわけでもなさそうだし、貧しい国に生まれたらそれはそれで世間一般的な幸せを掴む可能性は限りなく低いものとなるだろう。

……少なくとも、僕は今まで生きてきて、幸せを実感した事は無い。

断言出来る。

それ位幸せを感じた事が無い事に自信がある。

いや、それはないだろうと思いたい。

でも、僕には幸せが何なのか本当に分からない。

まあ日々の暮らして幸せを実感している人の方がこの世界では圧倒的に少ないだろうけれど。

ほんのささいな事で幸せを感じる事が出来る、と本には嘘か誠かわからないけど書いてあったし、そうなる僕にはほんのささいな幸せも巡って来ないのか、とマイナスイキな方面に僕の思考はバランスを失い沈没寸前の某客船の如く傾いてしまう。

幸せとは何かと考えれば考える程に訳が分からなくなってくる。

あゝ御免なさい……誰に謝ってるんだ僕？とにかく高校生の分際ですいませんすいませんすいませんなんなん僕があやまらなきゃいけないんだどうして僕が？なんでかな？いつもどうして僕が？僕が下らない人間だから？好きで人間やってるわけじゃないんだだけ？もういいんだ疲れたんだもう許してくれ本当にあーもうだめだ死んでしまいたい死にたい死にたい死にたい？っていうか君そんなに死にたい死にたいってホントに死ぬ気あるのかね？ええそうですとも僕は所詮死ぬ気なんてないですよーだって死んだって虚

しいし痛いし怖いしあーでも死にてー嗚呼 青春したいな
ー本気じゃないけどあー僕が分からないあーあああああ
あああああああああああああ死ぬってなだ？なんなん
だあー分らないあああああああああーあ、こちら辺で止
めとじ。

……だめだ。

思考が掻き回されてめちゃくちやになる。

いつもこれだよ。このまま行ったらまた授業中（戻る気はないが）
に発狂しかねない……。

結局、幸せがなんなのかなんて僕には分からない。

そもそも僕には分かる訳の無い事だったんだ。

……止めよう、こんなくだらない事を考えているとろくな事が

自殺頭痛

「……………なんで」

予兆はない。

その数秒前までは、どんなに下らない事だって考えられるし、本当になんの痛みも感じない。

だけど、僕には分かる。

いつもそうだ。

確かな前触れはなくても、僕は本能的に気がついてしまう。

あと数秒で、僕の頭が破裂すると。

「……………ヤバい……………頭が、やばいやばい、くる、くそ、タイミン
グわ」

それは突然やってくる。

タイミングなんて計れない。

そいつは痛みに耐える準備の時間さえくれない。

「があ、ぐ、ああああぐつつつつつつつつあああぐ、ぐつつがあ

ああああああああ」

僕は床に崩れ落ちた。

無様に顔面から。

右目の奥に、この世のものとは思えない痛みを感じたから。

立っている事など不可能だったから。

それは痛みなんて生易しいものじゃない。

形容するならそれは『死』そのものだ。

目の奥から生暖かい血液がじわじわと溢れ出してくる。

眼球の奥で、アイツが、僕の神経を、肉を、引き千切って、食い散らかしているからだ。

「うう、つつつつう」

もう、叫ぶ事も出来ない。

生まれてきた事を後悔する暇も無い。

絶望する事も出来ないまま、只、波の様に押し寄せてくる痛みを受け入れるしかない。

僕に出来る事はただ歯を食いしばって頭を抱えて唸る事だけだ。

唯一の救いは痛みで立ち上がる事が出来ない事。

もし立ち上がったら、僕は窓を突き破って校舎から飛び降りてしまっから。

死ぬ時まで誰かに迷惑を掛けるのはご免だ。

僕の願いは、今すぐこの想像を絶するような痛みから逃れる事。

声に出して叫びたい。

殺してくれと。

でも誰も僕を殺してくれない。

僕には死ぬ権利がないらしい。

だから死ねない。

死ぬ価値すらない。

頭の中の血管、神経を全て、根こそぎ引っ張り出してしまいたい。それができないのなら……。

痛みの波は徐々にその度を増していき、僕は自分自身の手で、いつそのこと右目を抉り出してしまいたい衝動に駆られた。

もう耐える事が出来ない。

僕の意に反して、手が右目へと向かった。

震える指先が、生暖かい粘膜を纏った眼球に触れる。抉り出したい。

衝動が抑えきれなくなっていた。

アイツが眼球を突き破って、外に出てくる前に、自分自身で、僕

を終わらせる。

もうそれしか方法が無い。

人差し指と親指で、滑った目玉を掴もうとした、瞬間。

両目から有刺鉄線を突っ込まれ、脳髓を絡めとられ一気に引き抜かれたと錯覚しかねない痛みを感じた。

反射的に指を離す。

痛みに応答して、眼球の奥から流れ出す様に、痛みが全身へと伝染していく。

心臓の鼓動が胸を突き破る程に、僕の体を上下させた。

目の前の世界が、何時にも増して、歪んでいる。

机も、椅子も、黒板も、全てが溶けてしまったかの様に、その形を成していない。

僕の頭の中の内容物が溶けてしまったからだろうか。

まるで薬の中毒者の様だ。

目の前の光景は曲りくねり、机や椅子が、まるで蛞蝓か何かの生き物の様に、床を這いずり回っている。

いつのまにか、痛みは無くなっていたが。

目の前の光景は、常軌を逸していた。

赤や青の光の柱が刺し込む様に乱立して、世界が光り輝いている。そんな光景の中で。

僕は何も感じなかった。

痛みは消えた。

そして音も消えた。

僕の間が無くなくなった。

僕は指先で眼球を掴んだ。

感覚が無い。

ただ目玉を掴んだという不確かな確信が有るだけだ。

指先に少しだけ力を入れる。

目の前の世界が圧縮された様に縮小する。

さらに力を込めようとしてみる。

目の前の世界が蝋燭の炎の様に揺らめき反転した。
掴んだものを、思い切り握りつしてみる。

目の前が、真っ暗になった。

パンチラプチキャバ女子（目の周りはパンダ）

「……………」

意識が有る。

少しだけ考えて、目を開ける。

目の前の光景は、いつも道理だった。

覚めてしまった。

もう一生目覚めないと思っていたのに。

何時もこれだ。

物事は思い通りに行かない。

全く嫌になる。

残念だけど。

仕方がないな。

「息は……………してるのか」

……………どうやら、僕は……………まだ、性懲りも無く、小指程の価値の
すら無い、いや、便所の落書き程の価値すらない人生を、生きてい
る様だ。

もう、頭は痛くない。

時計を確認する。

どうやら30分程気絶していたようだ。

……………。

なんかスースーすると思ったら……………なんで、僕は、パンツ一丁な

んだ？

……まあ、いいか。

今回は失禁もしてないし、目立った自虐行為の跡も見当たらない。髪の毛も……いつもよりは、引っこ抜いていない。

最悪な出来事の後にしては、悪くない状態だ。

しかし、まさかあの頭痛が、今日、来るとは。

薬はちゃんと飲んでいたはずなのに……全く、ついてないな。

最近、発症する間隔が短くなってきている様な気がする。

今回はなんとかあったけど、次にきた時にまた耐えられるだろうか……。

一体、僕はあと何回この痛みに耐えればいいのかだろう。

人間の体は痛みに耐えられる様に出来てるなんて適当な事を言っただけで居るとしたら、僕はそいつの顔を原型が無くなるまで殴ってやりたい。

そんな事を言うヤツは本当の痛みを知らないヤツだ。

人間は理解を超えた痛みには耐えられやしない。

人は痛みで死ぬ。

痛みで、死ぬんだ。

僕も早く楽に……。

「……………」

やめよう。

これ以上考えるとただでさえ低い血圧がもっと低くなってしま
う。

とりあえず……。

そうだ、保健室へ行こう。

あの絶望的な痛みはもう感じないが、もう授業に戻る気が
1 ミクロンもない。

そうだそれがいい。

そう思い、ベンチから起き上がろうとした時、

教室のドアが鈍い音を上げ、真横にスライドした。

…… タイミング、悪いな。

少しは時と場所を考えて行動してほしいものだ。

僕は慌てて、頭蓋を引つ込めた。

机と椅子の僅かな隙間から侵入者の様子を伺う。

青いチエックラインの入ったライトグレーのスカート、そして黒いニーソックスを履いた細い脚……うむ、太もも白いな、合格だ。

……と、ふざけてる場合じゃなくて。

女子？ しかも一人？ どの制服だ？ この学校のパンチラプ
チキヤバ女子の制服じゃないぞ……。

腕時計を確かめる。

まだ、どの学年の生徒もこの蒸し暑い中クーラーも無い教室で忍
者の如く授業を受けているはず、な時間帯だ。

息を殺して女生徒の動向を伺う。

どうやら、女生徒は真つすぐこちらに向かって来る様だ。

なんでこつちに来る？

まさか、僕がここに潜んでいるって事がばれた、とか？

……いや、それは無いはずだ。

僕の擬態は完璧、というほどではないが、あの位置から僕を視認
する事はまず不可能。

そこんところは僕が実証済みだし。

そんな事を考えて、僕があたふたしているのもおかまい無しに、
女生徒はどんどん近づいてくる。

これは、やばあい。

このままじゃ見つかる。

見つかったら後の対処が面倒だ。

なにより、話すのがやだ。ていうか消えてくれ頼むから三秒以内
に消えてお願いします神様仏様大仏様御老公様サマンサタ。

「……………」

全然消えない……。

なんで？

さて……どうしようか？

ここはまた寝たフリでやり過ごすか。

僕は腕で目を隠し、あからさまに寝たフリを実行する。

足音は、もうすぐそこまで近づいてきている。

と、足音は僕の目の前の長机の寸前で、突然、停止した。

なんか、ちょっとドキドキしてきたな。

ホラー映画だところという時、目を開けると目の前にお顔真っ白な化粧の濃い呪霊がいたりするので、腕をどかして目を見開きたいのを歯を食いしばり必死に我慢して寝たフリを続行。

足音はしばらく停止し、数秒後、もと来た道をコツコツというわざとらしい音と共に引き返していった。

そして、教室の扉の閉まる鈍い音が再び僕の耳に届く。

「……………」

どうやら、侵入者は自分の愚かさに気がついて去って行ったようだ。

もしくはボクのむさ苦しい姿（半裸）（パンツは履いてる）（少しはみ出ている）（汗だく）を見て尻尾をまいて逃げ出したか。

いずれにせよ、今回は何とか危機を脱した様だ。

やっとの事で眼前を覆っていた腕を払い、目蓋を開くと、

目の前に、

青白い顔の少女……いや、幼女の顔が、あった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255z/>

ねくら

2011年12月25日14時46分発行